

徳川齊昭と伊達宗城(五)

——嘉永元年の往復書翰(続)及び、同二年の往復書翰(一)——

河 内 八 郎

前号に続いて、嘉永元(一八四八)年の後半、八月以降の往復書翰から、同二年の冒頭、正月までのものを紹介する。前水戸藩主徳川齊昭と、前宇和島藩主伊達宗紀・同藩主伊達宗城の間の書翰の話題の中心は、第一に、北方蝦夷地海防問題にかかる松前家転封問題である。齊昭が寛政期以来の幕府の諸策を批判しつつ、松前氏の蝦夷地警備に全面的な不満を表明し、その転封を説くのに、宗紀・宗城も同意を表している。

そしてそれは、弘化と嘉永期の阿部正弘の海防策への批判となっていく、それが第二の話題となる。

さらに第三は、前から引続く、とくに兵衛関係の蘭書その他の、書籍貸借である。

その他、水戸藩情の動揺問題などに、宗城が関心を示していることも注目される。この問題は、水戸藩主徳川齊昭に対して弘化元年に加えられた謹慎処分に対する、齊昭自身と、藩内各層の雪冤運動として、幕府に向けられると同時に、藩内の対立派、すなわち齊昭らの表現で言うところの「奸物」・「姦派」との執ような対抗であった。伊達宗城が、齊昭から複雑な藩情をかなりくわしく、密かに知らされていることは、書翰の随所に見出されることであるが、

宇和島伊達家に現存する史料の中に、天保十年六月、將軍家慶に提出された斉昭のかの有名な「戊戌封事」をはじめとして、斉昭の上書・建白書類や覚書の、宗城自筆の写しがかなり残されていることが注目される。しかもそこには水戸藩の内部にかかわるものが多くあるのである。嘉永元年から二年は、新藩主慶篤への高松・守山・常陸府中三連枝の後見体制が、老中阿部正弘の公認のもとに崩れ、斉昭の藩政指導が実質的に回復されていく時にあたっている。斉昭が阿部老中への「対抗」から、宗城に自己の藩情を開陳している意図は一応理解できるとしても、遠く南豫の果ての領主宗城が、「藩情の好転を悦ぶ」と書き送る意図が奈辺にあるのか、単なる儀礼以上のものを推測させるのである。

四四、嘉永元年七月二十六日 伊達宗紀書翰、徳川斉昭宛（以下、典拠に*印を附す）

*『事修叢書 卷九』所収、但し、宇和島伊達文化保存会所蔵写本による。

『藍山公記 卷十五』嘉永元年七月二十六日条所収

『藍山公伝記 一』所引

以別紙内密申上候、委細御別紙^①而被 仰出候趣、日々存承仕候、遠江守へ之 尊翰も早速申伝、難有奉拜見候、委細自同人御請申上候、遠江守へも御内密御主意之趣申聞置候、乍恐如 尊慮此度所替と相成候得者、却而松家も永世断切不仕、却而難有事共義ハ、閣老ニ而含之様ニ相聞候得共、如何可相成哉、当時ハ何分閣老杯ニ而尤至極と受込は宜候而も、又いつれノ動きは、聞受宜而も又行違候事多く、何も当ニ不相成事ニ御座候得共、此度杯の事ハ^②実ニ誰ニ而も始終安心出来兼候事ニて、早々此処ニ而御決断無之而ハ、乍恐上之御不為、且本邦ノ恥辱に可相至事、私躰ニ而も黙し居かたく奉存候間、遠江守へハ重々申聞、是又相心得居、内々被仰出候趣ハ精々相励ミ、心力相盡度事ニ奉存

候、近来今やくと相待居候而も、一向別段ニ被仰出も格別無之、一日くと日も立、氣も秋ニ相成候様成申候、一日も早く何事も被仰出候様仕度ものと、乍不及も奉存候御別紙ハ拝見相仕舞候間、奉返上候、猶又追々自悴も可申上、又承候義ハ追々可奉言上、先過日之御請奉申上度、乱筆恐入候得共、如此御座候、恐々頓首、謹言

七月廿六日

宗 紀

- ① 本文中の「別紙」とは、次の「四五」の書付ならん。
 - ② 伊達遠江守宗城（宗紀ニ春山の養嗣子、宇和島藩主）
 - ③ 松前藩主松前志摩守の転封問題
 - ④ 前号「三九」に触れた、夷人十五人の松前漂着事件
- 内容 一、悴遠江守宗城への書信にも併せて謝意

一、松前家の転封問題、老中辺にてその動きあるも、未だ実行なし、決断を心待つ。

四五、嘉永元年七月頃 徳川斉昭書付、伊達宗紀宛

この「書付」は、先に徳川斉昭より宗紀に送付されたものを、宗紀より「四四」書翰に附して返送されたもの。
* 『事修叢書 卷九』所収、但し、同前。

『藍山公記 卷十五』嘉永元年七月二十六日条に、「四四」の別紙として所収
『藍山公伝記 一』に、「四四」とともに、「水戸老公ヨリ送付別紙付箋」として所引

○文化四年丁卯三月廿一日

松前若狭守 ①

蝦夷地之儀ハ、古来より其方家ニ而進退致来候得共、異国ニも接候島々、万端之手当難整様子ニ付、先達東蝦夷地上

地被 仰付^②、從 公儀御所置被 仰付、西蝦夷の儀は非常之備等其方手限難行届段申立、外国之境不容易事ニ被 思召候間、此度松前・西蝦夷地一円被召上候、依之其方へ新規九千石被下、場所之儀ハ追而可相達候
右御老中申渡之候

但、御礼席之儀ハ是迄之通可相心得事

(烈公御付箋)

先年とても、今とても、不容易義ハ同様と云中、殊ニ近来ハ先年ニ比すれハ異船の渡来も数多く、此まゝうかゝ被指置へき時とも不忘れ、天下の有志も議し可申事也、扱先年初ニ東蝦夷御引上ニて、追て如本文西蝦夷迄御引上ニ相成ハ、御見抜き之無事也、如何となれハ、一円取てだに海防不行届ニ、東蝦夷御引上ニて、收納莫大ニ減し、右ニて西蝦夷の海防可相成筈ハなき事也、此後御引上ニても、是ハ初より一円御引かへて相成可申事也

○同年七月廿七日

松前若狭守

常陸国 信太郡、鹿島郡、河内郡

九千石 上野国 甘楽郡 群馬郡

陸奥国 伊達郡

右替地被下置候旨

△在所、奥州伊達郡梁川^④ 江戸より七十五里

○文化四年丁卯三月廿七日

松前美作守^⑤

若狹守隱居、初大炊介と云

其方儀家督中、蝦夷地取治不行届、異国人手当も等閑ニ心得、其上致隱居候而も、言行不慎之様子ニ相聞、不埒ニ被思召候、依之永蟄居被 仰付者也

右者、大目附伊藤河内守昨晚若狹守屋敷へ相越、柳生但馬守、寄合池田百介指添被申渡

（烈公御付箋）

此節ハ一橋・水羽・土岐等^⑥への賄路莫大ニて、外老中扨ハ一向不存、不時ニ天より降下りしよしや、一橋へ鷹・馬等度々差上たる中ニ、五尺五寸の早馬上たるも此時のよしや

○文政四年辛巳十二月、松前旧領御返シ^⑦

○天保己亥六月頃、隆之助病死^⑧

六月廿一日

池田信濃守

名代 千村彈正少弼

柳生但馬守

一柳土佐守

松前隆之助事、未 御目見も不致候処、病氣ニ付、種々遂養生候へ共、難治之病ニ而、迺も御奉公可相勤躰無之候、依之領知松前・蝦夷地、一円差上度旨、隆之助始、一類共、一同相願候、各申談、達 御聴候処、松前、蝦夷地草創之家柄ニ付、格別之思召を以、養子被 仰付候ニ而可有之候條、相応之養子可被相願候
右於脇坂中務大輔宅、同人申渡之

(烈公御付箋)

思召ハ難有事なれ共、此時土地御引かへにて、如以前難義不致地被下候ハ、追て事出来たる上、嚴重可被仰付よりも、松家の事なりきと思はれし、一日も早く御引上ニ相成、相応の地被下候へハ、永世松前も家名を残し、天下の御為ニも可然御事也

松前の臣ニても、心有て先見する人ならハ、今の中早く可然土と御引かへニする事良策なるべし、其内ニハ丸々つぶす事も出来べし、本文の節も賄路ハ莫太遣候よし承り及

○七月廿一日

松前隆之介

名代 柳生但馬守

弟 準次郎^⑧

松前隆之助事、未若年ニ者候得共、病身ニ付、願之通準次郎儀養子被 仰付旨

右、太田備後守申渡之

(烈公御付箋)

旧松旧領ニ相成候上ハ、格別目ニ見え候海禦手当もいたし、尚又夷人義も感服いたし候様無之てハ不相成候処、一切左様の義無之、其後隆之助幼年にて家督ニ相成候へハ、同断の処御目見無之、病死致候へハ、有志ハ一同又々御引上ニ不相成候てハ相成間敷申候処、賄路の功驗とハ乍申、格別之御仁恵にて断絶も不致、準次郎義又々養子ニ被 仰付候上ハ、如何ニも勵申候て、海防の義ハ勿論、夷人撫育も行届申候様無之候てハ不相成候処、過日御申聞之有様ニ成行候段、此上ハ如何様被 仰付候ても無己事ニ候、松家へ御仁恵被遊候為ニ、日本の恥辱ニ相

成候だん、時の 將軍の御恥辱永世まで人々議し可申、金銀吹替並日本の地を失候義、日本開け候てより 徳川の天下ニ初り候だん、流の末をくミ申候我等迄残念至極の事ニ候、ラツコ島へ赤人初て来り申候も、寛政の度ニ有之、委細下官手控有之候、乍然其節迄ハ此方々も行、ラツコ獵いたし候所、追々赤人多来候故、蝦夷人行候事不相成、今ニテハ蝦夷人ハ一切不行事ニ相成、全く此方より奪セ申候事ニ候、寛政の度には、松家が書出し候図ニも、ラツコ島領地ニ書入有之、又近頃 公辺へ出し候図ニハ、エドロフ切にて、ラツコ島をハ赤人の島と存候哉認出し不申、尚又享和の頃ニ至り候てハ、ラツコの皮も内ニハ此方より米を遣し交易致し候て、表向ハ如以前蝦夷人ニて取候様いたし候事ニ有之、右之外内交易ハ追々有之候、金銀の吹かへすら、今ニ至り候てハ元へ返し候義御六ヶ敷可有之、只水羽等の為ニ欺れ、水羽にて御加増いたゞ候迄にて、水羽の為ニハ相成候とも、永世幕府の御不為、且徳川家の恥辱ニ相成義、又松一家の為ニ 日本之地を失れ候をも、其まゝ被指置候のミならず、此上ニも奪れ候ハ目前、如何ニも恐れ入候時と存候、第一仕置入念候様ニと申御達ニハ叶不不申候へハ、如何様相成候ても無己、尚夷船押来候ハ、不行届ハ指見也

○十月十六日

蝦夷松前一圓

隆之助養子

松前準次郎

名代 鍋島紀伊守

隆之助家督無相違被 仰付、隆之助之通領分之仕置入念可申付候^⑧

右太田備後守申渡之

○志摩守先祖ハ町人也、寛政ニ庚戌年、老中本田^⑨正松前と云モ、蝦夷地ニ而日本人ノ住居スル地ヲ松前ト称シ、夷人^⑩大弼所著^⑪、又外本も同断

徳川斉昭と伊達宗城^⑫——河内

居住ノ地ヲ蝦夷ト称ス、土人ノ云伝ニ、鎌倉時代ニ津輕・南部ノ間ニ武田九郎ト又武田悪太郎トモ云、出所不知云商人有り、秀衡繁

昌ノ時、蝦夷ノ産物ヲ荷テ、秀衡ノ館ニ往来ス、九郎知才アル者ニテ、義経公ノ良將タルヲ知りテ、蝦夷ノ地理ヲ語

リテ、松前ノ地ヲ開キ給ワント、義経公浪居ノ身タルニヨリテ、九郎力頼ニ応シテ從者卅四人、九郎ヲ案内者トシテ

松前ノ地ニ渡リ給ヒテ、從フ夷人ハ和シ、シタガワザルハ攻討給ヒテ、日本ノ属島トナシテ、松前ノ地ハ九郎ニ与ヘ

給シヨリ、次第ニ日本ノ風俗ニナレ、習ヒテ今ノ如シ、蝦夷人義経公ノ事ヲヲキグルミト称シ、弁慶ヲヲシヤマ

ルミト云ヒテ、今以祭ルト云、蝦夷ノ地ニ弁慶畑ト称セル所アリ、弁慶夷人ニ粟・稗ヲ植作ル事ヲ教ヘシ地ト云、又

弁慶崎ト云所モアリ、義経公蝦夷渡ノ説数多ナリ、信ジカタキ説ナルニヨリ不記、松前候ハ武田九郎子孫といへり、

別書ニ 後花園帝嘉吉三年、武田太郎源信広、蝦夷志ニ、若狭守信広、始称武田太郎、後称蠣崎、又改称松前、畢

竟ハ耽なる事不分故、色々と称したるならん、惡の字も去リテ、太郎とのミいへるならん、されハ源といふも、御当

家へ宜しき様ニ称るならんか、先年 公辺証書出しの節、義経の子孫のよし書出したる処、御取受ニ不相成かのよし

也、若其後賄賂ニテ義経子孫ニ相成たる哉不知、
右故公辺へハ先祖不分敷の申出と覚えたり、

過日松前太郎と認たるハ誤り、武田悪太郎なれハ書拔ニ御見セ申候也

○一小之松家嚴重武備有之、又異舶来る度、公辺へハ嚴重人数指出たる杯届れ共、先ツハ地下傳といふ者杯かき集

て、人数とはいふ者也、地下傳といふハ目見えする町人の事也、請負人杯ハ皆他の人なれハ、事於出来ハにけ帰るハ鏡ニかけたるが如くな

るべし、カンサツカ迄ハ昔より蝦夷の千島と歌ニもよみて、正しく日本の地なりしか、追々に赤人ニ奪れ、寛政の頃

か、ラツコ島迄も奪れたるハ、皆松前武道なき故の事ニテ、カンサツカハ勿論、ラツコ島迄も奪ても恥とも思ハ、

又追々ニ喰入ハ指見えなり、松前の追々不屈ハ無己事なれ共、於幕付恥辱と思ふ御役人も無之、其まゝニなし置事、

徳川の名折也、昔より日本の地なりしを、徳川の天下にて追々奪るれ共、夷狄ニ恐縮して取返す事も出来不申のミならず、此上又々奪はれんニも、其仕法なきといふハ、時とハ乍申、無是非御事也、夫のミならず、蝦・松を奪るゝニおいてハ、内地ニ喰入事ハ眼前に見ゆる也、二百余年の太平とハ乍言、武士の面をかむりたる上ハ、上下御役共遠慮有りて、一日も早く御仕法あらまほしき事也

- ① 松前藩主松前若狭守（のち志摩守）章広
 - ② 享和二年七月二十四日、幕府、松前章広より東蝦夷地を上知せしむ。
 - ③ 文化四年三月二十一日、さらに西蝦夷地を上知せしむ。
 - ④ 福島県伊達郡梁川町（福島市東北方）
 - ⑤ 文化四年三月二十七日松前章広永蟄居
 - ⑥ 一橋家（十一代将軍家斉の実家）、老中水野出羽守忠成（在任文政元・八・二十一―天保五・二・二十八卒）、大目付土岐丹波守頼旨（在任弘化二・三・二十一―同三・三・二十八）
 - ⑦ 文政四年十二月七日、松前志摩守章広に旧領蝦夷地領有を復す。
 - ⑧ 「慎徳院殿御実紀 卷三」（『国史大系』49 「統徳川実紀」第二編）によれば、天保十年己亥十月十六日、松前藩主松前隆之助（良広）没。遺領は養子準次郎（昌広、志摩守）嗣ぐ。
 - ⑨ ラツコ島Ⅱ臘虎島、得撫、ウルツプ島のこと。
 - ⑩ 老中格本多弾正大弼忠籌、磐城泉藩主（在任寛政二・四・十六―同十・十・二十六）
- 内容 一、文化四年三月二十一日付、松前若狭守章広宛、西蝦夷地一円召上、新規九千石領知、給与達状写（斉昭意見） 先に東蝦夷地召上げのため収納減少せし故に、松前藩の海防策もままならず。当初から一円召上げをすべきなりし。近來は異舶渡来更にしきりなりし故、松前家国替えの決断をまつ。
- 一、文化四年七月二十七日付、松前若狭守宛、常陸・上野・陸奥三国の内九千石替地宛行状、在所は陸奥国伊達郡梁川一、文化四年三月二十七日付、松前若狭守宛永蟄居申渡状（斉昭意見） 此節、一橋・水野・土岐等えの賄路莫大なり。

一、文政四年十二月、松前家旧領復帰

一、天保己亥(十年)六月二十一日、松前隆之助御目見前にて大病故の領地返上願に養子採用の助言あり、親類池田信濃守ら三家より養子願。

(齊昭意見) 養子許可に反対、一日も早く領地召上ぐべし。松前臣にも有志の者有るべし、當時も賄賂は莫大なりしならん。

一、天保十年七月二十一日、松前隆之助へ弟準次郎の養子仰付

(齊昭意見) 松前旧領に復せしより後、海防策に見るべきものなし。準次郎養子入り後も事態は悪化するのみ。松前家への仁恵は日本の恥辱ならん。特にラツコ島にては蝦夷人の狩猟・交易後退せり。水野出羽守の施策は幕府の為ならず。

一、天保十年十月十六日付、松前準次郎宛、家督仰付。

一、(齊昭意見) 松前家由緒記事

一、(齊昭意見) 寛政期にラツコ島を赤人(ロシア人)に奪われし轍を踏むべからず。一日も早き処置を望む。

四六、(参考書翰) 嘉永元年八月三日 伊達宗紀書翰、徳川齊昭宛

* 『事修叢書 卷九』所収、但し、同前。

『藍山公記 卷十五』嘉永元年八月三日条所収

以別紙内密奉言上候、兼々近年來異船渡來ヲ始メ、形勢ハ閣下被為懸 尊慮候御義、不肖之私ニも乍恐其義ハ実ニ心頭ニ不絶、不安心奉氣支上候時勢と、愚察仕候、勿論上ニモ此時勢ハ深御考も被為在候事ニ可有之とハ乍憚奉存上候事ニ奉存候、乍恐数代御当家へ奉仕、御高恩奉蒙、内外之無差別誠忠不相盡而ハ不相叶義ハ申上候迄モ無之、何レ之大名と申事も無之同然之義ニ奉存候、近世之趣相考候而ハ、如只今平穩無事ニ相安居候而ハ、後年甚以不安時勢と奉存候間、一席共之内ニも、一両輩ハ當時ノ形勢歎息仕候面々も御座候間、遠江守より申合、一同相揃、幕府御為ヲ奉存上候面々、閣老衆迄名々愚意申上候而ハ如何可有之哉、如何ニも御大事ノ義と奉存候、私義ハ退隱之義ニハ候得

共、御為奉存上候事ハ、隱居と申ニ而も同様之義、可相黙御時節共不奉存候間、乍憚外へ愚意容易ニ申述先モ無之、
閣下ニ而ハ毎々私愚意ノ趣ハ疾より御弁別も被為在候事故、不顧失敬、御内密御教示ヲ奉願度、諸大名一同高祿ヲ
頂戴仕、二百余年御治世之奉蒙 御恩沢、一席之輩一同後年御不安心ニ奉存上候御時代奉考、御為と奉存候ヲ相黙候
ハ柔弱之至、不本意之義、有志之可有之義とハ不奉存候間、内密 尊慮ノ趣奉伺度、遠江守へ申聞、同席中ニ而同
意ニ奉存候輩より、名々以書附閣老衆へ申達候而ハ如何可有之哉、名々志ヲ相尽し、御取揚ノ有無ハ、乍恐 上ニ御座
候義、実意ヲ不奉言上ハ不忠ノ至ると奉存候、兼而私一存之愚意閣老衆迄申述度相含、御内々達 尊聴候所、閣下
ニ而も兼々委曲上へも被 仰上、閣老へも被仰述候御義も御座候得共、御取揚モ格別無之、却而愚意申述候而も無益
之事ニ可有之、差控候方可然趣ハ御内々蒙 尊論候事も御座候故、其後ハ相黙居候得共、私義は退隱之身分ニ而御座
候得共、諸大名今日家国之政事ニ相預、在勤之輩ハ當時之形勢不安心ニ奉存候面々、愚意ノ趣ハ申上、 上之御取捨
ハ兎も角も、御為と乍存不奉申上ハ不忠之至、名々其職分ニも不相当義歟と私ニハ奉存候間、同席内申合之上ニ而、
名々愚意之趣ハ閣老衆迄は達耳候様ニ而ハ如何可有御座哉、可然筋と乍恐被 恩召候得者、遠江守へ申聞、追々一同
愚意ノ所承合度奉存候、乍憚御内密奉窺 尊慮候も恐多く奉存候得共、実ニ當時大名之内ニも相談仕、是非分別仕候
輩も少、此段極密尊慮之程奉伺上度、善惡理非之处御教示被成下候得者、重々難有奉存候、不肖之私義も安心仕候間、
此段申上奉呈候、尤松前坏之事も書加へ、彼地之様子も見聞之所ハ申上候心得ニ御座候、実ニ御大事ノ御時節と奉存
候、只今ニ始り候事ニハ無之候得共、余り近頃ハ防禦等之義も近年被 仰出候計ニ而、追々被 仰出も御座候哉と
奉待上候得共、今日迄モ被 仰出も無之、只相黙し候も不本意之至、一席之面々も及内談、存慮等も承度、乍憚此段
尊慮之程奉待御教示候、恐惶頓首、謹言

八月三日

宗 紀

① 伊達宗紀、弘化元年七月十六日致仕、伊豫守、伊豫入道を称す。養子宗城封を嗣ぎ、遠江守。

内容 一、斉昭の蝦夷地問題の憂慮に同意。

一、近時の異船来航、海防問題につき、諸大名より幕府老中へ意見書を提出するは如何。

一、右の件につき、斉昭の意見を問う。

一、遠江守（宗城）へも右の件申聞かす。

一、かつて申し述べし意見は、老中にて取上げられず。

一、松前家の事もあり、一層の大事と思う。

四七、嘉永元年八月三日 徳川斉昭書翰、伊達宗城宛

＊『聿修叢書 卷九』所収、但し、同前。

『藍山公記 卷十五』嘉永元年八月三日条に、「四六」に続いて所収。

御別紙令披閱候、然者近来異船追々渡来、蝦夷・琉球等ハ如何にも不容易有様、右ニ付候てハ、御一席の方々二百余年の御厚恩を厚難有被存候よりして、天下の御為筋、御心付の義 御申立被成候ても苦敷有之間敷哉、下官義ハ每度御懇意ニ付、御内々御聞被成候との義、何も承り申候所、御承知被成候通り、当將軍様ニてハ、御家督之御砌より質素倭約、文武の御政事ニて旧弊御一洗被遊候御義、明君の殿ハ申上候迄も無之御事ニ候へハ、御一席の方々天下御為ニ相成候様ニと被存込候義と、乍恐奉恐察候、切又、世の諺ニ、愚者一得と申候へハ、下官杯も心付候義ハ申上候、況御一席の方々何レも賢明故、乍勿論悪しき事ハ有之間敷候処、万々一御了簡違有之候とても、明将の御義、御申上不宜候へハ、御取用無之迄と存候故、何事ニ不寄 天下の御為と御心付の義ハ、無御伏威御申立の方可然と、於下官ハ存申候、前文ニも申候通り、御為筋御一席より御申上ニ相成候ハ、御満悦ニ可被 思召、又御了簡違ニ候ハ、御取用無之迄と存候へ共、下官杯ハ申上候、每度万々一御不興ニ相成、御咎ニ相成候とても、右を厭不申上上

ハ忠ニは無之候へハ、申上候、毎度御咎ニ相成候覺悟ニて申上候へき故、御相談の上ハ、何事ニ不寄 天下の御為と
被心付候義、御一席ハ勿論、誰ニ不限、下官へ相談有之候へハ、御為筋黙候様ニとは不申聞候、依御答如此候、
草々

即刻燈下腐眼ニて認、御推覽奉給候也

嘉永元八月三日

① 將軍Ⅱ第十二代將軍家慶（寛政五年生、家齊二男、号慎徳院、在職天保八・四・二—嘉永六・六・二十二卒）
② 「愚者も一得」、「史記 淮陰侯伝」の「愚者千慮、必有一得」による。

内容 一、宗紀書翰への即刻返信

一、天下の為に心付きの事を申立てるは一向に苦しからず。

一、更に、伏藏なく何事も申立てるべし。

一、自分も不興を買い、咎め受くる事を恐れずに申上る所存なり。

一、自分への意見も待つ。

四八、嘉永元年八月八日 伊達宗城書翰、徳川斉昭宛

* 『事修叢書 九上』所収、但し、同前。

『藍山公記 卷十五』嘉永元年八月九日条所収

拙楮拝呈仕候、過日ハ不存寄度々御投翰被成下、難有、忙手正襟拝誦申上候、尊諭之趣、夫々奉謹承候、則左に奉復
申上候

一、バク之方御模様宜様被為成候段拜伺、重疊奉大賀候段申上候得共、尚又阿闍^①より指上候御密紙為御見被成下、且
窮鼠喰猫の勢に付、御口服之御用心御配慮被為在云々相伺、扱々恐入候次第、如何計か御配慮可被為在と奉存候、

扱阿闍より過日御密紙三復覽読仕候處、不決着之文詞も御座候而、解様次第様々に可相成と奉存候得共、是迄之御改正之儀推遵之處申上候條、随分主張いたし御座候様奉存候、何れバク之御模様快晴之光景とハ竊に奉恐察而、難有雀躍仕候儀御座候、窮奸如何体之儀可仕も難計、旧御服始萬端御配慮重々願敷、侍史之面々不残有志に候ハ、六七輩にても金池湯池の国と奉安心候得共、如何之面候哉、甚奉氣支候、御守殿被差上物も、先生物計御上けに相成、自然と御疎遠被為成候由、無止御処置御深慮奉感服候、小石川へも右等にて自然と御出も御間遠に被為入候由、恐入候儀御座候、天下之御為尊牀御大切、小事にハ不替御儀と奉存候、奸者之惡略ハ正人よりハたくみ候ゆへ、片時も御油断不相成儀奉存候

②、下金ろうの義ニ付、御守殿許云々申上候所、無相違奸計被思召、御本丸御奥にても右様之者と御懇意に被為成候ハ、御叛逆云々抔申、奥之面々を欺候ゆへ、左も有之へく、絶言語次第と奉存候、其本ハ、筒下抔より万々一奸之儀為御申被成候様儀有之而ハ不相成と申考にて、色々ふせき事と被思召候由、御明察の通りと奉存候、如何様ふせき候而も、天下之有志ハ善惡邪正明白候義にて御座候所、浅間敷者也と奉存候、且中山カ私邑を有司へ内談にて、公領江取替、其外無御例御加増抔御座候由、不届と申も餘ある儀、必使の国賊と奉存候、将又、高松中將之儀ハ、折角同席中に而も、有志之者ハ驚愕仕候儀御座候、其外辰年前之儀奉存候得ハ、丸壊とハ申上度候得共、当今ハ土崩と可申、実に残念千萬の御様子に相伺申候處、前條の儀相伺候而ハ、弥無相違儀と奉恐入候、扱委曲御教示被成下度と被思召候得共、御筆紙にハ不被為盡御儀ニ付、イタより承り可申旨、奉畏候、其内右様之極機密事承せ候者も、当年ハ座右に無御座候、萬一漏泄いたし而ハ不相成候ニ付、容易之者へハ応対も不申付、しふこん位の者⑥に候ハ、不苦候得共、奸人色々手を廻し候時節、可成遠くしいたし候方可然と覺悟仕申候

⑦、養家之妹後妻に取組候儀、バク之方聞續候得ハ、尊家御同様不相成御法之由御座候、夫故下きんも唱を替居候

儀と奉存候、且又奸より 尊館にてハ御見合に相成候趣申聞候とも、下きんにてハ、尊躰より御沙汰無御座候得ハ、脇方へ遣し候儀ハ相控可申趣心得申聞様、右之儀過日申上候通り奉長候由御座候、何れ奸方にて種々悪計めくらし候而、萬々一右よりして下きん不都合に相成候而ハ、萬一 尊躰御為にも不可然、下にても不首尾の儀ニ付、少々時節御見合被為在候方御良策と、乍憚愚考仕候

一、松蝦之儀ニ付、過日御内々申上候処、御承知被成下候由、尚又御委細御教戒被成下雖有奉存候、只々天下の御為、先てんばふ云々のきもきりに、処々有志の御役人へ密話可仕旨、折角僕も無他念、右之儀ハ申述候事にて御座候得共、迥も愚論貫徹仕間敷と歎息の至奉存候、然し一度申懸候儀ニ付、決而他人の為に見合候儀にハ無御座候、随分申述候心得に御座候得共、只々諸有司中聴込候人も稀少之様、愚昧にハ相考申候、其上先年バクへ御誠忠の御卓論被仰上候御儀さへ御取用も無御座候、況草中之小蟲也も無益の儀とハ奉存候得共、実ニ一度蝦地他人の手に落候上にて、英明卓識之貴官人扱被遣候而も、取帰し候義容易ならぬ事と、其儀残念至極に奉存候、万雀万聲不如一鶴一聲とかも申候通り、御直ニ被仰上候御忠謀さへ御取用無御座候に、喋々愚昧之経論吐露仕候儀ハ、心得違にも可相当と、其処 尊慮の程慚愧仕候儀御座候

一、追々御手元に而御取入に相成候御書目拝見之儀奉希候所、当時御虫干中ニ付、被為済候ハ、拝見可被仰付旨、重畳難有、相樂居申上候

一、国学之儀ニ付相伺候得ハ、御委曲御教示被成下、重畳難有奉存候、加之聲文私言御投与被成下、別而難有仕奉存候、如御卓論、武家ハ武家の儀ニ付、おくれを取不申儀肝要ニ付、大道之国学成り候上ハ、其他ハ武の学問可然云々、御妙論と感服奉申上候、且、兎角鉄棒の御論、是又祈望の儀御座候、士氣振起の策第一と奉存候、且拝借之御書物、今少々拝借仕度、会沢著述迪彝篇^⑨、是ハ昨冬弊邑にて、ためより到来仕候ニ付、返呈仕候、藤田著述^{籠居中著}

述御常陸帶儀御初政以来の^⑩ 扨到来、朝暮披閱、感激羨慕奉申上候座候

一、因婚之義、先日より申遣候所、此度ハ賀州次男養子ニ可相成、血脈も無御座候ニ付、又壹岐守娘妻縁可仕候趣御座候、無摺訳柄ニ付、何分強而も難申遣、乍残念夫切に仕申候、此段奉申上候

一、馬之讀御染筆之義ニ付申上候処、尚又被仰出候趣、乍憚御尤至極奉存候ニ付、又御一左右次第程宜可申聞と奉存候、且双鶴御高讀御詠、だん紙へ奉希候処、願候者可申上旨、右ハ乍恐僕奉希候儀御座候、夫故先日別段不奉申上、御不審被思召、奉恐縮候、将又一齋申候ニハ、榊原越中方にて^⑪ 尊書懸物ニ相成居候処、久々にて拜見仕候由相話候き、此度御断之御考合にも可相成哉と奉存ニ付、申上置候、神祖之儀思召被為慕候段恐入難有思召奉感服候段、数度相話、御噂奉申上候、決而僕考候にハ、奸之廻し者とハ不相考候得共、画柄故もし一齋難有さに吹聴いたし候而ハ、当時之御付合如何と心配仕候儀に御座候、外之御文字に候ハ、深々 御配慮被為在候儀とも不奉存候、鶴ハ四季に無御座候、雜の方宜敷、随意の儀申上、奉恐入候得共、此段奉相願候、何も恐惶草略、頓首百拜

八月八日

再伸、敬白、藤堂へ高虎著述御沙汰之書名相認、可差越旨申遣候所、不存寄御所望、本懷至極、忝仕合奉存候処、実ハ書名すら覚不申、是迄遺稿扨見受候儀無御座候、潑といたし候儀慚愧仕候得共、何分一寸相考候而ハ、右書物ハ無御座奉存候旨、尤高虎有馬温泉へ罷越候儀御座候間、其頃之紀行とハ相考候得共、旧記ニも歲月記載不仕位、今と相成何分不相分趣相話し、右仕合故、程能申上候様相願申候、尤高虎相認候もの、外に為差品も無御座候得共、二百ヶ條と申者御座候処、専士道之儀相認候由、右に候ハ、乍塵本、座右に御座候間、御沙汰次第内々私迄可差越旨申聞候間、此段申上候、御一覽被為在度候ハ、早速取寄、可呈と奉存候、此段奉申上候、恐惶不備

① 老中阿部伊勢守正弘（在職、天保十四・閏九・十一—安政四・六・十七）。水戸藩にあっては、弘化元年五月六日、斉昭の

致仕・謹慎後、新藩主慶篤を、三連枝すなわち、松平讃岐守頼胤（高松藩主）、松平大学頭頼誠（守山藩主）、松平播磨守頼繩（常陸府中藩主）に後見させた。しかし、藩内の対立・動揺、斉昭雪冤運動の激化などで、阿部老中は三連枝及び水戸藩附家老中山備後守信守を通じて、その元年後半以来、しばしば注意を与えている。斉昭自身も、阿部に対してしばしば藩情を訴え、その結果「姦物」といわれた結城寅寿らが弘化四年十月二十四日に処分される。前々号「三〇」註①、及び前号「三二」註②
③参照。なお『水戸藩史料』別記下、のほか『新伊勢物語』にくわしい。しかし斉昭雪冤運動は激化する一方、斉昭が藩士高橋多一郎、鮎沢伊太夫らと通じていることが問題化し、水戸藩は嘉永元年七月十二日、高橋・鮎沢を蟄居処分にした。六月一日には阿部老中より、三連枝後見の失策を指摘する論書が出されている。さらに八月三日、三連枝、及び、江戸・水戸の執政六名（中山信守以下）が、斉昭に対し、郷中有志の者と結ぶを戒める書が出され、八月七日直ちに斉昭はそれに反論するとともに、それを阿部へも示して弁明した。阿部は斉昭の主張と立場を次第に理解するようになっていたものように、宗城はそれを悦んでいる。翌嘉永二年三月十三日、表向きは藩主慶篤が十八歳となったことによって、三連枝の後見が解かれるが、そこには「後見失政」という判断もあったものと考えられる。（『新伊勢物語』）

② 下金、下きんⅡ下曾根金三郎信敦（甲斐守）。前号「三九」註③参照。

③ 筒Ⅱ西丸留守居（前江戸南町奉行）筒井和泉守政憲、下曾根金三郎はその次男。

③ 中山Ⅱ水戸藩附家老中山備後守信守。

④ 辰年Ⅱ弘化元年、その年五月六日の、斉昭致仕、謹慎を指す。

⑤ イタⅡ板倉周防守勝静、備中松山藩主。

⑥ しふこんⅡ宇和島藩家老松根図書のことか。

⑦ 宗城の養子入りした伊達家には、当時生存していた妹が二人いた。一人は正、天保九年生れ、安政五年十月肥前島原城主松平忠精に嫁す。もう一人は節、天保十一年生れ、安政四年十一月上総飯野領主保科正益に嫁す。

⑧ 「声文私言」、水戸藩国学者吉田令世（活堂、寛政三Ⅱ弘化元）著、天保十二年弘道館助教、史館編修も兼。

⑨ 会沢安（正志斎、天明元Ⅱ文久三）、「廻葬編」天保四年成る。

⑩ 藤田彪（東湖、文化三Ⅱ安政二）、「常陸帯」弘化元年成る。慶応二年板行。前号「三九」註⑥参照。

⑪ 賀州次男養子の件Ⅱ未詳。

⑫ 壱岐守Ⅱ未詳。いずれも義弟宗徳の縁談関係か。

⑬ 一斎〓佐藤一斎（坦、捨藏、安永元—安政六）、儒者、朱子学者であるが陽明学の影響も強く受ける。多くの門人を持つが、伊達宗城もつながりを持っていた。

⑭ 榊原越中守〓未詳なるも、駿府久能山惣御門番の榊原家が代々「越中守」を称す。

⑮ 藤堂〓藤堂猷、伊勢津藩主。

⑯ 藤堂和泉守高虎（弘治二—寛永七）、著作としては、「高山公御留書」、「虎豹雑談」、「藤堂和泉守高虎息高次江遺訓条々」（寛永二）、「御天守土台石垣大積」（慶長十七）などがある（『国書総目録』による）。ここで問題となっているのは「遺訓」のことか。

内容 一、水戸藩の内訌に対するバク〓幕府の態度は、次第に望ましい方向に向っていると思うも、阿部老中の「密紙」には、

なお不安の点あり。

一、下曽根金三郎に奸計ありとするは不当なり。

一、中山の所領交換、加増は不屈きなり。

一、高松（水戸連枝、松平頼胤）の態度も残念千万。

一、妹縁談のこと。

一、下曽根引合せは時期尚早か。

一、松前家転封の意見が取上げられざるは残念。

一、追々収集の書、虫干後の借覧を樂しみ待つ。

一、国学者についての意見に感服。拝借の書物、今少々拝見を望む。

一、会沢安「廻葬編」を返却。藤田東湖「常陸帯」の到来を謝す。

一、婚姻のこと。

一、画賛のこと。

一、藤堂高虎著書について問合せの件。

四九、嘉永元年八月九日 伊達宗城書翰、徳川斉昭宛

* 『事修叢書 九下、御書翰類 宗紀公・宗城公』所収、但し同前。

『藍山公記 卷十五』嘉永元年八月九日条に「四八」に続いて所収。

別紙拝呈仕候、先日奉申上候夷匪犯境録二冊奉入電覧候、御慰に被為成下候ハ、雖有奉存候、毎戦敗衄遺憾の事ニ御座候様奉存候

一、先頃被相下候留飲御卓論、再三覽読仕候処、簡易ニ而致易き御高論、感伏仕候、下金儀も重畳冥加至極難有狩り申候、以後と屹心懸、養生可相尽旨申出候

一、バク在勤有志之面々、下金へ承り可申上旨、折角相尋候処、御教示被為在外心付無御座趣申聞候、僕愚考仕候所、随分少々ハ御沙汰之外にも有志の者可有之候得共、バク当時之御様子にて、各潜勢仕居候儀と奉存候、尚又追々見聞奉申上候半、人ありて人なきを衰世と申候やに承り候儀にて、多時長大息のみに御座候様奉存候、百拝

八月九日

敬白、別紙奉服ハ昨日相認候ニ付、相違可仕と奉存候、入道よりも一封差上度趣ニ付、拝呈仕候、恐惶不備

① 「夷匪犯境録」、木・火・土・金・水の五巻。

アヘン戦争史。安政四年板行されるが、伊達家「御重書乙圖書類」の中に、五冊の写本、火（卷之二）の写本、及び一―五合冊一冊の写本の三種類の写本が所蔵されている。第三のものの末尾に「己酉（＝嘉永二）冬通閱一過」と宗城筆の書込みがある。

② 前号「四一」留飲論、嘉永元年七月八日、斉昭より宗城宛。

内容 一、「夷匪犯境録」二冊を呈覽す。

一、先ごろ送付の「留飲論」を謝す。下曾根金三郎よりも謝意。

一、幕府在勤に「有志の面々」ありや、下曾根に尋ねるも、他に心付く者なし。恐らくは、人ありても「潜居」してあらん。

五〇、嘉永元年九月十一日 伊達宗城書翰、徳川齊昭宛

＊『事修叢書 九下』所収、但し、同前。

『藍山公記 卷十六』嘉永元年九月十一日条所収

八月念八日之尊翰難有奉拜読候、相済候義ハ例之通り恐惶仕候得共、文略仕候、夷匪犯境録二冊呈候所、御写相済次第被相下候由、奉畏候、次も追々可差上と奉存候

一、かきんろ御一見被為在候得共、御深慮も被為在候ニ付、時合御待可被遊、依之可否御沙汰無御座旨云々、御細書之趣奉畏候、早速かきんへも申聞候処、畏候旨申出候、尊慮に被為叶候ハ、冥加至極之儀ニ付、決而脇方杯へ遣候儀ハ無御座、潜居為仕置候旨、別紙之通申越候故、奉入 尊覧候、一昨日出仕之節、尚又つゝへも申述候処、重々難有かり、左候ハ、乍不肖万事教示も氣長く出来、都而難有奉存候旨申出候儀御座候、御安慮被為在度奉存候、此上ハ蒙 命儀を相待候のみと奉存候、且又先頃僕へ下きんより来帖中、しうしんしうに御座候云々と有之処にて、被遊御熟考候而ハ、万々一奸家にて筒金を落し可申ために、如何様之義を天下へ達し、如何様の事をふらせ候而も不相知、うそ位の事にて金筒へ疵相付候様にて不相成候儀云々、御苦心被思召候段、重々難有望外之儀可奉存候、全右しうしんしうハ、左様之儀にてハ無御座、養妹表向不相成処、不得止次第にて、妾と相唱居候儀を申越候間、必御関心不被為在様奉希上候、又先達而御請申上候節申上候、御守殿より下きんの儀云々御沙汰有之との儀、下きんへ何より響候や、人名杯可申上旨、序に聞繕可申上と奉存候

一、過日奉願候鶴の画御高讀之儀、早速御許容被成下、不存寄御画讀とも御揮毫被成下、殊に絹地数枚様々御認被成下、重畳冥加至極難有奉存候、長久重宝仕候儀奉存候

一、馬讀之儀ニ付、御委曲被仰下候趣、早速一齋へ申伝候処、重々難有仕合奉存候旨、僕より相願候より、小石川よ

り言上之方御都合宜敷旨、御教示被成下候付、改而下方迄相願候旨申出候、万一老人へ被下置候而ハ、御為に不宜様被思召候ハ、必強而希上候訳にハ無御座候間、御見合被遊度旨申出候

一、外舶渡来も当年ハ無御座、対州・松前方出沒仕候儀も、近日ハ承知不仕候、松前一條、過る五日、阿闍へ逢、尚又様子相探候処、何分 御賢慮、且愚意の趣にハ不相成趣聞込候ニ付、段々無伏藏、以鈍舌愚意之處申置候得共、姑息の御処置にまた相成そうに奉存候、何ともく遺憾千万恐入候儀御座候、最早松前並蝦夷地共に失亡不遠事と奉存候、如何なれハかくハ難響事や歎慨に不堪至奉存候

一、藤堂高虎著述之書名不相分旨申聞候ニ付、其旨申上候得ハ、尚又御別紙被相下、恐承仕候、早速申聞候得ハ、国元之方吟味為仕候上にて御請可申上旨、御操入被成下候儀、本懷至極奉存候故御座候ハ、聊秘し候訳にて無御座指上度存念に罷在申候、追而相分候ハ、可申上候、将又幕府御役人抔有志之儀ニ付、尚又被仰出候趣奉畏候と篤承繕候上にて可奉申上候

一、蘭人別段極密風説書手に入候間、密々奉入電覽候、最早御通閱被為在候半とハ奉存候、遠西騒乱、仏王は英夷へ落行、其他各国一揆起候趣云々相見申候、可喜儀奉存候、察此時 廟堂御英断之御処置有御座へき儀と、只々奉仰儀御座候、僕懸念仕候ハ、丸俗人とも此事を聞込候ハ、折角嚮進之修壞一件亦相弛可申哉と恐怖仕候、将又当節ハ蘭書も多々渡来、兵書並に字典抔も御座候趣伝承仕候、追々相廻可申兼々御注文被為在候御書物、此節持渡り申候哉、奉相何度候、唐船も二艘此間入津仕候由、唐風説も追々相分り可申やと奉存候、甚恐入候得共、此風説書ハ御通閱被為済候ハ、早々御返投奉希上候

一、藤堂高虎著述二百ヶ條写差越候間、呈上仕候、是以御一閱被為済候ハ、御返し奉願候、恐々謹言

重九後二日

敬白、此木綿甚如何敷御座候得共、弊邑より書付名元之者、老身にて手織仕候趣にて差出、昨夕到来仕候ニ付、御一興迄に、老の手織故、奉入笑覧候、御叱留も被成下候ハ、難有仕合奉存候、恐々不備

宗 城 拜

賢明公閣下

呈侍史中

- ① 八月二十八日齊昭書翰、伊達宗城宛、所見なし。
- ② つつし簡井政憲。「四八」註③。
- ③ しうしんしうし未詳。

内容 一、八月二十八日付書翰への返書。

- 一、「夷匪犯境録」呈覧の件。
- 一、かきん（下曾根金三郎）引合せの件は、なお時機を待つべし。その旨も、本人に申開く。
- 一、右の件は一昨日簡井へも伝う。
- 一、簡井追落しの動きあり。
- 一、妹の縁談。
- 一、下曾根引合せの反響如何。
- 一、鶴の画の讃依頼、許容への謝辞。
- 一、馬讀と佐藤一斎。
- 一、当年は外国船渡来なき様子。
- 一、五日に阿部老中に会う、松前の処置は遺憾。
- 一、藤堂高虎著書名の教示を謝す。
- 一、蘭人よりの極密風説書（六月二十九日長崎入港、提出）を呈覧に供す。
- 一、ヨーロッパの騒乱、各国一揆の風聞を知るし一八四八（嘉永元）年フランス二月革命。

一、最近は蘭書（兵書・字典）も多く渡来しあるの由。

一、唐船も入港あり、唐風説も追々わかるべし。

一、藤堂高虎著述写入手、呈覽。

一、領国産の手織木綿を送る。

五一、嘉永元年十一月五日 伊達宗城書翰、徳川斉昭宛

* 『事修叢書 九下』所収、但し、同前。

『藍山公記 卷十六』嘉永元年十一月五日条所収

先頃ハ御密啓被成下、難有奉謹誦候、乍略儀事済候儀ハ、別段御請不奉申上候條、御海恕奉希上候

一、下きんろう之義ニ付、段々有志より被遊御見合候方可然、愚拙よりも申上候儀御座候處、兩人御欠にて如何にも

御人支ニ被為在候間、極御内密 御廉中様へも御内話被為在候所、御同様當時奸家之氣御ぬきの方可然と被思召、

扱それには兩人出来可申處、まづ奸撰出の方一人被召抱、郷奸にても安心可仕と被思召候由にて、至極御同意に被

為在候得共、最初下きん方へ云々被仰下置候末、外より被召抱候而ハ、下きん存候所も如何可有御座と、御配慮被

為在候由、序に極密内意相尋可申上旨、早速に申聞候處、別紙の通申出候間、必御配慮不被為在様奉存候、奸氣を

抜候為には、至極可然と奉存候、下きん藏書の儀も別紙の通り申越候間、是又差上申候

一、御建白被為在候而、阿勢へ被遣候御写拝見仕候所、一々御卓偉之御先見と乍憚奉感服候、与屹阿氏覚悟にハ相成

可申と奉存候、聊心付申上候儀も無御座候、且又去八月中御三藩へ被仰渡候海防之義、于今三御連始御國中へ不相

達由、尤尊覧にも入不申由、扱々不埒千万の義御座候、私共へハ為何御達も無御座候得共、是迄之通り只々御達し

計にてハ、幾度被仰出候とも、乍憚御無益の事と奉存候、被仰出候柄ハ違背仕、防禦筋不整の向ハ嚴重被仰付、相

整候者ハ御賞詞位ハ無御座候而ハ、人氣も振起仕間敷、所念所好に反候てハ、実ハ被行兼可申、何事も氣運次第の儀と、昼夜草奔中に、呻吟仕候外無他事御座候

一、松前の儀も、建白周旋無用と相成、矢張姑息の取扱にて、伯父家相続相成事にて、最早幕にてても、松蝦の地ハ被置度外候儀と奉存候得ハ、扱々無止御儀と慨歎仕候、為何御処置も不被為在、みす／＼莫太之地へ被併有候儀ハ、実に遺憾千萬の儀にて、天朝へ被為対、何と御申訳可被遊、諸大名より御不審申上候而も、御教諭之被遊方も有御座事かと奉存候而已に御座候

一、阿氏当六之頃危難に可逢処云々にて、よふ／＼相遁れ候由、御聞被遊候由、扱々危キ儀御座候き、松式も奸人と奉存候、先年同人義、浦賀御備向見分仕、帰府後早速私も逢候故、如何と相尋処、最前考候とハ違、手廣之御場所、容易にてハ御備向も不被相屈事と相考候由、余程見込も厚く相見得候処、其後勘定局より被解付、終に私念相変し、つまらぬ論申出候者に御座候、奸智ハ相応に御座候間、守山に組し、奥へ取入候事ニ奉存候、此間、清水御家老軀役高運の者御座候、本丹ハ甚しき御寵臣、且美にて、奥向もよろしく御座候由、遠外之私輩、深宮之事ハ可存訳も無御座候得共、表にてハ本丹、奥にてハ姉切と申事ハ、夢中に聞得候儀御座候、何レ視鮓之妄、宗朝之美にあらされハ、今之世に免る難き之聖語なと存出候得ハ、千古一轍と不堪恐怖奉存候得ハ、別而 御配慮被思召候儀と奉深察候

一、幕老女一ヶ年御手当之外三千位に相成候由、扱々莫大之儀と被思召候ニ付、同席共一ヶ年進物ハ如何程相送り候や申上候様奉畏候、同席中にて少々異同ハ有御座候得共、表向よりハ參勤御礼ノ節、白銀五三枚位送、其外何も送り不申儀御座候、内願手筋杯にて送り候儀ハ、各家秘し候故、不相分候得共、定而相応に送り候者も可有之と奉存候、表向にてハ聊の事奉存候、三千とハ莫大之儀、閑老程ハ役ニ付出費も無御座候半故、却而富有二有之事ニ奉存候、

バクより何程御手当御座候ものや相伺度奉存候

一、阿・牧^⑩之外、海防懸御役ニ申上候様、別紙にて差上申上候

一、宇満し美道^⑪拝借被仰付、重疊難有仕合奉存候、漸写相仕舞ニ付、返納申上候、跡ニ冊御写被為済候ハ、拝借奉希候

一、夷匪々録之義^⑫、土金水三冊差上候様、此間下方迄被仰出候趣とも奉畏候、段々延引奉恐入候、未タ写出来不仕候間、不遠可奉呈候、外珍書為差書も無御座候得共、此間訳出来候ニ付、練卒訓語八冊奉入貴覧候、御写被為済候ハ、被相下度、タクチーキも追々差上奉り候半、肥前守先約ニ付、当時出来候九冊ハ、彼方へ遣置申候、返却仕候、速可呈と奉存候

一、近日奸人共相替儀も無御座候や、委曲之義不相分場よりハ、甚尊体御大切御用心被為在度事と奉存候

一、琉球在留佛人^⑬も、当七月頃一人病死仕候、残り之者ハ八月下旬軍艦一艘迎に参り、連歸り申候、英奴ハ依然在琉仕候由、八月廿六日迎船参り、廿九日帰帆仕候趣、尤将官其外も上陸、処々巡見仕候由御座候、在留人荷物少々残置候故、琉人より船へ可相送と申候得ハ、其節船より申候ニハ、又趣次第来年可参候間、残置可申、もし不参候ハ、右荷物ハ是迄久々預世話候間、其方共へ進候旨申述、直ニ出帆仕候由、可惡挙動に御座候、其上能き序故、英人も帰可申と、琉人より進メ候得ハ、却而致立服、此方ハ英人故、決テ佛人の船杯借用いたし可帰筋無之、其上國王より帰命も無之内ハ、決而不罷帰趣申候由、極密承知仕候、右兩條ハ届書面ニハ無御座、機密事故、此段申上候、外にも相替義御座候ハ、又可奉申上候、先ハ荒々御請申上度、如此御座候、恐惶謹言

仲冬初五

宗城百拝

① 斉昭簾中ニ吉子、有栖川宮織仁親王女、登美宮、文明夫人。

徳川斉昭と伊達宗城(四)——河内

② 次の「五二」の書付、下曽根藏書「砲書目」

③ 八月六日、「八月の海防強化令」とは具体的に未詳。

④ 松前藩主松前昌広（準次郎、天保十年家督）の継嗣に、昌広父見広末弟崇広（為吉、盈之助）が決まり、後嘉永二年六月九日家督を譲る。

⑤ 松式＝松平式部近韶、海防掛目付の一人、嘉永元年五月十四日、幕府は、先に西丸留守居筒井政憲に対して異国船打払の復活等について諮問して徴した意見書を、海防掛に示して評議させた。松平近韶は石河土佐守政平、松平河内守近直、佐々木信濃守顯発らとともにそれに参加した。

⑥ 守山＝森山源五郎孝盛か。

⑦ 清水家老転役＝弘化三年八月八日、清水家老曲淵甲斐守景山を一橋家老とせしことか。

⑧ 本丹＝本郷丹後守泰固、將軍側用取次。斉昭の雪冤運動の際、水戸藩士高橋多一郎らが、將軍への歎願の取次ぎを依頼した一人。

⑨ 姉＝上臈姉小路、橋本イヨ、勝光院。

⑩ 阿＝老中阿部正弘、牧＝老中牧野備前守忠雅。

⑪ 「宇満し美道」＝水戸藩国学者吉田令世著、「宇麻斯美道」九卷。

⑫ 「夷匪々録」＝「夷匪犯境録」ならん。

⑬ 「練率訓語」＝オランダ人藉珀子著、兵法訳書、八卷、続六卷、原著名未詳。

⑭ タクチャーキ＝「三兵客古知幾」、高野長英訳、前号「三五」（参考史料）註⑨参照。

⑮ 肥前守＝鍋島齊正（のち閑叟）、佐賀藩主。

⑯ 琉球在留仏人＝仏人宣教師アドネ Adnet 七月一日那覇にて病死。七月二十八日仏船那覇に來航して、滞留宣教師ル・チェルシエ Pierre Marie Le Turdu を連れ去る。

⑰ 英奴＝英人医師ベッテルハイム Bettelheim は依然として在留。前々号「二〇」註①参照。
内容 一、下曽根引合せは、見合すべしとの意見もあり。「姦家」勢力への配慮も必要と思う。

一、下曽根金三郎藏書「砲書目」

一、阿部伊勢守への建自書写しを拝見。

一、八月中、三藩へ渡せし防海策、未だ国中へ伝わらざる由、不埒なり。

一、松前の処置につき、建白を用いざるは遺憾なり。

一、阿部老中、六月の「危機」を何とか回避す。

一、幕府老女一か年の収入。

一、阿部・牧野の外の海防掛へ意見書を呈す。

一、「うましみ道」の借覧を謝し、写し済み、返納す。

一、「夷匪々録」Ⅱ「夷匪犯境録」その他の図書の件。

一、近日「奸人」共、罷免にならん。

一、琉球在留仏人一人死去、一人八月二十九日帰国。

一、英人医師は依然として滞留す。

五二、月日未詳 伊達宗城書付、附、砲書目

* 『聿修叢書 九下』所収、但し同前。

『藍山公記 卷十六』嘉永元年十一月五日、「五一」書翰の別紙として所収

御密封御届被成下、難有奉拝見候、炮兵書目御覧ニ入申候様、又娘之義ニ御座候、被仰下候通り、少々恩召も被為
在候御義ニ御座候、恩召ニ叶候義ニ候ハ、何時迄も差置事ニ御座候

砲書目

兵学小識^①

海防新篇

兵制全書

火具篇^②

三兵多苦知機

ミリタイレ ハン ヘレトンス コール記^④

右之通り所持仕候、御序之砌 老公江御差出奉願候

① 「兵学小識」鈴木春山訳書。前号「三五」註⑦。

② 「海防新篇」、「兵制全書」、「火具篇」ハ何れも翻訳兵書と思われるが、原書名未詳。

③ 「三兵答古知幾」ハ「前号「三五（一）」註⑨参照。

④ 軍用書、書名未詳。

内容 一、砲兵書目を斉昭に逢る。

一、娘、いつでも差出さん。

一、下曾根より、斉昭へ提出を依頼されし「書目」

五三、嘉永元年十二月五日 伊達宗城書翰、徳川斉昭宛

* 『事修叢書 卷九』所収、但し同前。

『藍山公記 卷十六』嘉永元年十二月五日条所収

御密啓難有拜見仕候、然ハ不存寄御稜物小鴨被下置、重畳難有仕合、御礼難尽于筆紙、早速挙家一同拝味仕候処、別段之好風味、毎度御懇篤之御義、千万奉感荷候

一、御手痛御依然被為在候由、乍去段々御快服可被為至候間、奉安心候様、何卒御加療被為在度、来春ハ別て餘寒猛烈と推察仕候間、何分宙内御養生專要奉存候

一、水土^①ろう之義、初而承知仕候、水越両人共、扱々奸媒猾略之至と奉存候、此頃水土と松三と雙方実子分之儀ニも^②め候由御聞込被為在候由、深宮中の儀中々私忤可存様ハ無御座候得共、尚見分の上、相分候ハ、可申上と奉存候、^③

御細密に御教示被成下、難有奉存候、各様々姦件御座候半と奉存候

一、五家段々相含儀御座候次第坏、御詳委相伺、初而承知仕候、扱々不本意千万の至、御三親藩へ罷在、永久御補翼申上候而こそ、神祖神慮にも可相叶儀にて、只今と相成、御藩を離れ度と申ハ不屈所存と奉存候、如只今各

御藩に御附申上居候てこそ、人も成瀬・中山坏承知もいたし候得共、御藩を離れ、大に相成而ハ、願望仕候ものも無御座事と奉存候、絶言語候不量見に御座候、左様の心底ものまでハ御三親藩に罷仕候而も御裨益にハ更ニ不相成儀ニ奉存候、何分 明公御政事に御係被遊候而ハ、其身／＼の上か怖敷候故、尽死力御開明を防候事と被思召候旨、

段々は迄之様子熟考仕候末にてハ、御明察之通りと奉存候、乍然如何ハかなり逆もいつ迄も暗夜にも有御座間敷候、

只々機会を被得候迄之処、御大事と奉存候、御大事とハ乍恐御口腹と御身体の御用心御用ひ被遊度奉存候

何れ追々御開明ハ近より候様奉存候、近頃ハ阿も無二之御味方と相考候ニ付、毎度敷話風論仕候儀御座候、私話候ハ、乍憚是非／＼御開明の儀も申立候事

にてハ、却而不宜と奉存候ニ付、辰年以来ハ、御藩御政務大小を不論、瓦礫より土崩に相成、実に水府計儀ニ無御座、天下の御不為無此上事にて、北門ハ明ヶ放し申へく、数年明公御辛苦の末御更張被為在、御諸政氣運とハ乍

申、かく迄相崩候條、扱々遺憾無量、殊に忠臣孝子ハ日の光も見候儀不相成仕合にて、如斯 聖明の幕朝に、如此御親藩御危害に被為懸候処ハ、不可解御事と奉存候、如一門でも候儀にて御座候処、對話毎に実徹宜敷相成候儀覺

申候、扱閣新出来候ニ付、阿溜へにけ舎にハ無之や云々、乍憚御尤の御不審と奉存候、先頃右の儀ハ私不審も仕候処、決而左様の儀にハ無御座、赤心の程容易に顯候儀御座候、何を申而も只今彼一人のみと奉存候

一、いつの事御座候や、御登城のせつ、坊主より 宰相へ、明公より諸大名へ御文通被為在候儀ニ付云々申上候間、かく迄御懇篤被成下候事故、油断仕間敷旨難有奉存候、用心仕候故、御安心被為在度奉存候

一、御左右被召遣候者も追々かん家ニ而引かへ附奉り候由、扱々可惡儀御座候、御幃幕中御油断不相成、御枕席にも

御用心被遊候事と恐入、残念の至、憤歎此事奉存候、御示諭の趣奉授候、近日かんの光景詳悉仕、無此上難有奉存候、然し苦心難堪存上候儀御座候、御守殿向並宰相君御招杯も、種々御心悩被為在候故、御心底に不被為在由、当今之処にてハ些と御不都合の様御座候得ハ、萬一奸件杯を相用候時ハ取戻し難相成、一大事に御用心被為在候儀、乍憚深謀遠慮と奉存候

一、ハクろふ取込高之義も御教示被成下、難有仰天仕候、后宮隆盛之程想像仕候、其他相濟候事ハ、乍恐再度本復不申上候

一、過頃、阿闍より打払再評之儀申上候由、何卒早々御評決有御座度被恩召候旨、兼々其儀ハ渴望仕候儀、何卒御英断被為在度事と奉存候

一、玉海並御書目御恩借被成下、重疊難有仕合、則玉海五卷ハ謄写相濟候間、返納、何分後冊御惠借奉願候、夷匪犯境録土金水三冊、段々延引仕、恐入奉存候、漸々一昨日先方より差越候間、先ツ其儘差上申候、御写被為濟候ハ、被相下度奉存候、タクチーキ肥前守より返却仕候ハ、可差出と奉存候、当夏入電覽候蘭書一部、御用被為濟候ハ、御下ケ奉希

一、先頃、為^⑥御良葉被下置、早速便宜に遣候処、冥加至極重疊難有仕合奉存候段、私迄御礼申出候、為・庄共丈夫消光仕候間、乍恐御安心被為在度奉希候

一、下金へ先頃ハ不存寄結構之燧火袋被下置、則表向ハ私より遣候趣にて頂戴為仕候処、冥加至極御礼難盡筆紙、難有仕合奉存候旨、御礼申出候儀御座候、早速明春小金原御出獵御供之節御用候旨、深々御礼申上度由申出候、先頃同方御頼相成候御一封、未^⑦タ同人手元に無御座、返納仕候様奉授候、早速申遣候得ハ、不相下以前より相下候ハ、渡し^⑧くれ候様申越居候ニ付、石徳方へ相届候由申越候間、左様御承知被成下度奉存候、將又下曾禰へ被下候火打袋、

御秀詠の染筆、別而興起仕候御事にて、乍恐浦山敷御座候間、明春御暇被下、帰藩之節、野生へも一ツ御投与被成下度、近頃恐怖之申上様御座候得共、奉願上候、先ハ御答等之御請奉申上度、乍憚草略不文惡筆、御覽御仁恕奉希上候、恐々頓首、謹言

臘月五日燈下調筆

敬白、先頃ハ 五郎殿・八郎殿之御揮毫、伊与入道へ被下置、早速相伝候得ハ、重畳忝仕合奉存候旨、可然御礼申上度旨申出候儀御座候、実に満案生輝御筆意、沈着御美事之御儀、感服仕候、以上

藤原宗城

- ① 水土 水野土佐守忠央、紀伊新宮藩主、紀伊藩附家老。
- ② 水越 水野越前守忠邦。
- ③ 松三 松平三河守慶倫、美作津山藩主。
- ④ 成瀬 成瀬隼人正正肥、美濃犬山藩主、尾張藩附家老。
- ⑤ 中山 中山備後守信守、常陸松岡藩主、水戸藩附家老。「五家」とは、他に尾張藩竹腰（今尾）、紀伊藩安藤（田辺）の附家老のことか。
- ⑤ 「玉海」宋王忠麟編の、公用文・詩文模範例集、二百巻のことか。
- ⑥ 為 菊池為三郎（重善）、及び庄 庄兵衛、水戸藩士で宇和島藩在中。前号「三二」註⑤など参照。
- ⑦ 「五二」のうち下曾根より廻せし「砲書目」
- ⑧ 石徳 石河徳五郎幹忠、水戸藩士。
- ⑨ 五郎殿 齊昭五男・五郎麿、嘉永三・八・二十五、鳥取藩主松平因幡守徳栄養子、慶徳。
- ⑩ 八郎殿 同八男・八郎麿、安政元・八・十三、川越藩主松平典則養子、直候。
- ⑪ 伊与入道 宗城養父宗紀（伊豫守、春山）

内容 一、小鴨贈与の礼。

一、手痛（神経痛）の容体を問う。

徳川齊昭と伊達宗城——河内

- 一、水野土佐守忠央を知る。その周辺の動き。
- 一、附家老（尾張成瀬、紀伊水野、水戸中山）の自立の動きは不届き千万。
- 一、辰（弘化元）年以來の水戸藩内の政情を案ず。しかし阿部老中は、斉昭の味方と考えてよし。
- 一、水戸姦家共への注意。
- 一、ハクろふ「幕府老女の「取込」（収入）高の教示。
- 一、阿部よりの打払再評議の件。
- 一、「玉海」借用と、「夷匪犯境録」呈覽の遅延。
- 一、「タクチーキ」は、鍋島より返却の上。
- 一、菊池為三郎への良薬下附を謝す。
- 一、下曾根金三郎への燧火袋下附を謝す。明春小金原狩獵のお供で使用せん。
- 一、自分も火打袋、詠詩揮毫を明春帰藩の折には所望したし。
- 一、伊豫入道（養父宗紀「春山」）への五郎殿・八郎殿の揮毫を伝達せり。然るべき謝意あらん。実に秀筆なり。

五四、嘉永元年十二月二十二日 伊達宗城書翰、徳川斉昭宛

* 『事修叢書 九上』所収、但し、同前。

『藍山公記 卷十六』嘉永元年十二月二十二日条所収

此間ハ御密紙被相下、謹読難有奉存候、御手痛御加療、御口腹御用心被為在度段奉申上候得ハ、御委曲御教示被成下、重畳難有、乍憚先以安心申上候

御主殿御出之節ハ、別段御側にて御こしらへ被進候由、扱々難有思召、左候ハ、御安心の御義と奉存候、扱又御口復のみに無御座、万一さいかふ御異事被為在候得ハ、五・八かふ被為立候ニ付、三ノ後を引のはし候口実云々、扱々御深慮之程恐入奉存候、決而左様之御儀者有御座間敷候得共、御念に御念ハ被為付度御儀と奉存候、右等之儀相伺候

而ハ、実に昼夜不安心ノ御儀と、只々奉氣支候、何卒早々春陽發生之氣暢達仕、寒氣一洗之期相祈申候

一、かきんへ被下候袋ノ儀ニ付奉希候処、段々御配慮被為在候段相伺、扱々今更相願候儀恐入奉存候、決而左様の御つかふに御座候得ハ、不申上以前に被成下度、袋のやふれが恐敷事奉存候

一、鶴肉少々献進仕候得ハ、望外之御謝詞被仰下、重々本懷之至、難有奉存候、御老養之御一助相成候段、本望無此上、又御入用被為在候節ハ、御沙汰被成下候ハ、奉呈候半、且御名産浮亀皐沢山頂戴被仰付、重々難有、先年も頂戴仕候処、夏向环腹渴の者へ拝味為仕候処、神効を得候儀度々御座候間、相願度奉存居候処、別而難有奉存候、又勝男塩からも御恵投被成下、好下物故、度々可拝見儀重々難有奉存候、毎度種々頂戴被仰付、御懇篤之御儀、御礼難盡于筆紙奉存候

一、陣羽織之儀ニ付、相願候次第御座候処、舶来之品不相用と申心付ハ、随分尤被思召候得共、虎も我国之ものに無御座、虎嘯生逆風よりハ神国ハ科戸の神を祈可申筋と被思召、且右畫も 尊慮にてハ桜の花ハ外国に無之品故、模様仕り、桜の花の散やすきに武夫の魁にて為神洲命を捨候に譬候ハ、可然と被思召、御諭も云々拝見被仰付、与篤と再考も仕候処、誠に 御卓説の通り、虎ハ猛獸候得共、外国之もの我神洲に限り候さくらの模様に咲出候の御諭御染筆被成下候ハ、至極宜敷御座候半、御深遠の御高論感服申上候間、来春為認差上候半、恐入候儀御座候得共、さくらの御詠筆願上候浅愚の存付耻入申上候、虎の方ハ御下ヶ奉希候、扱又大炮も彼之品候得ハ、羽織も笑候よりハ真似もいたし候とて笑候半とも被思召候旨、彼よりハ左様も可相唱候得共、何にても良法利器有之候得ハ、取用ひ、彼を防候手当に仕候儀ハ聊尋敷儀にも無御座候、 皇国之大量故と奉存候、炮計にも無御座、軍艦舳も擬造相成度、追々彼の真似計不仕、彼より卓出仕度事ニ奉存候

一、野人儀、昨年出立後ハ、下曾禰へ之御通路、愚父方へ御頼相成、宜敷御座候や申上候様、先便御沙汰御座候処、

此間申上落候ニ付、又々此間御尋被為在、重疊奉恐入候、何も差支筋無御座候間、私同様無御遠慮被仰下候様奉存候

一、玉海五冊、又々拝借難有奉存候、^②碓囊説一卷も御恩借被成下、是又写取候上、返納申上候半、御書目六冊ハ返上仕候

一、被仰下候蔵本三冊、差上申候、蘭書の儀奉申上候処、右ハ全私不調法にて、^③当秋御下に相成、又直に脇方遣置候処、矢張差上置候様相覚、唐突之儀申上、奉恐入候、御海恕の程奉願候、海録下ハ追而相下候由奉畏候、先ハ御請申上度、草略、恐々不備

臘月廿二日

宗 城

① 科戸〓しなどのかぜ、風のこと。

② 「碓囊説」〓未詳。

③ 「海録」〓未詳。

内容 一、手痛見舞、飲食物御用心申上への返書を謝す。

一、身辺の用心。「五・八かふ」云々、未詳。

一、下曾根への火打袋を自分も所望せし事。

一、鶴肉献進への謝辞に恐縮す。

一、名産の浮亀旱を謝す。

一、かつお塩辛を謝す。

一、陣羽織の件、虎の図か、桜の図か。桜の花の論。

一、自分昨年帰国出立後は、下曾根との連絡は父宗紀へ依頼しありたり。

一、「玉海」又々拝借を謝す。

一、「碓囊説」も借用致したし。

一、「書目」六冊は返上す。「五二」の「砲書目」返上。
一、その他書物の貸借。

五五、嘉永二年正月二十六日 伊達宗城書翰、徳川斉昭宛

* 『事修叢書 九下』所収、但し、同前。

『藍山公記 卷十七』嘉永二年正月二十六日条所収

(1)

御別紙謹而奉拜誦候、旧冬陣羽織之儀ニ付云々御教示被成下、且御秀詠杯御染筆被成下候処、愚意にも不相応候半なと云々、御遜讓之御沙汰重々恐怖至極奉存候、委曲別紙ニ而御礼申上候間、草略仕候

一、旧臘松蝦之儀ニ付御沙汰被成下候事にて、如何なる義や、当春ハ可相分、追々探り之上可申上と被思召候処、只今ニ何とも不申上候間、如何や可申上旨奉畏候、僕義も申上度と奉存候間、一日々々と相待、既に過る十六日にも一角^①へ逢候間、探候得は、未タ不相分義御坐候、餘程之月数最早御英断可被 仰出やと奉存居候処、無際限事に相成申候、当時前蝦之模様御見聞にても御坐候故に、急に不相分事歟と被相察申候

一、鍋肥ニ而綿菓出来候歟ニ被遊御承知候処、兼々私へも被仰下義故、相分り居候ハ、可奉申上旨奉畏候、折角心懸居候義ニ而、既ニ先日肥手製ハ些少計到来仕、試候処、随分猛烈ニ出来候様ニ存候間、早速製法之義尋遣し申候、最早来月初ニハ返答可有御坐と奉存候、申越候ハ、速ニ可申上と奉存候、肥も十七八度出来損候旨申越候故、定而書付任せにてハ難出来と奉存候、長崎へ被仰遣候諸書ハ、当三月ハ御手に可被為入、其内ニハ有御坐と被思召候旨、何卒御註文被仰遣候蘭書目、不苦候ハ、拜見仕度候

一、加より来候松閑^②又々入鬼錄候様御承知候由、右ハ一向伝聞も不仕候、過日少々風邪氣とハ申事候得共、為差義と

ハ承知不仕候

一、過日いよ入道より呈翰仕候ニ付、段々御満足被思召、御趣意御申聞、重々恐入奉存候旨申出候、扱又其時も被仰下候通り、かきん事追々六角共有志に引入候様心懸候義可申聞旨、御教示被為在候得共、尚又私よりも可申伝旨奉畏候、只今も四角丈ハ家人も入門仕居申候、其内事実ハ下きんより引込候義ハ甚六ツケ敷事と奉存候、既二一角引込み之義も段々僕より直二一角へすゝめよ／＼相始候位の義候得ハ、かきんより引こみ候義ハ無覺束奉存候得共、尊諭之趣ハ可申聞と奉存候

一、四角か五角に相成、一角抜可申含と又々此頃相評候義被遊御承知、日夜御心配被為入候旨、一向私抔ハ承知も不仕候間、重々見聞上可申上候得共、弥左様にも御聞入被為在候ハ、尚又相何度奉存候、何を申而も何れ一角ハ一角丈の処御座候間、萬一抜候義御座候而ハ不相成義と御同情苦心此事ニ御坐候

一、此處麻布ハ時節柄不似合候得共、此節弊邑より差越候ニ付、進呈仕候、此甘鯛二喉ハ例之通此頃參着仕候間、相添奉差上候、当節之ハ小き方にて、風味も不宜義と奉恐入候、將又此麻布ハ六具家地抔にいたし候而ハ随分用立申候、陣羽織にも仕候者御坐候、何れ業平男子之着服には不相成事と奉存候、御一笑／＼奉希候、恐々不備

孟春廿六日朝

奉服極密

① 十六日一角に逢ニ未詳なるも、老中の一人か。四角、五角云々も、嘉永元年十月十八日、松平和泉守乗金・松平伊賀守忠優（忠固）の老中任命のことか。

② 松閑ニ未詳。

内容 一、去年冬の陣羽織についての教示、及びそれに揮毫の件。

一、松前家処置の問題、一向にわからず。

一、鍋島家にて綿火薬製造の報あり、早速製法問合す。

一、長崎へ注文の蘭書目拝見致したし。

一、松閑死去の報あり。

一、下曾根金三郎の同志拡大の動き。

一、麻布、甘鯛を進上。

(2) 別紙

別紙拝呈仕候、旧冬ハ陣羽織地江御秀詠奉希候処、速ニ御出詠御染筆被成下、加之御註文被為在候結構之大和錦地御恩贈被成下、重畳難有仕合、御札楮毫ニ而難尽申上、子々孫々相伝、永代重宝ニ仕候義御坐候、御詠御揮毫奉希候すら恐縮奉存候処、錦迄別段被相添、段々御懇篤之御義深々難有仕合奉存候、先ハ右御札奉申上度如斯御坐候、恐惶謹言

敬白、御詠歌染させ候よりハ、矢張乍恐御揮毫奉願度、御真筆ニ候得ハ別而難有、永代御高德を奉仰、御武勇を奉竊慕候義御坐候、且段々御遜讓之御教示奉恐入候、有栖川宮へ御願も可被成哉云々奉畏候、全公之御高德御武勇を奉仰希候故、不顧恐奉願候義にて、他人ニてハ不相叶候義ニ御坐候、其内額字を奉希上度処、御願被成下候御義ハ出来可申哉、御内々奉伺上候、恐々不備

拝呈

内容 一、陣羽織地への揮毫を謝す、真筆に価値あり。

一、大和綿地恵贈を謝す。

一、教示の如く有栖川宮へも願出ん。

五六、(参考書翰) 嘉永二年正月二十七日 伊達宗紀書翰、徳川齊昭宛

・『聿修叢書 九下』所収、但し、同前。

『藍山公記 卷十七』嘉永二年正月二十七日条所収

(1)

謹而奉呈愚翰候、春寒退兼候得共、先以 閣下倍御機嫌能被為渡、乍憚恐悅之至奉存候、然は過日ハ尊書被成下、難有奉謹読候、最早別段再貴酬不奉申上候内、要用別紙ニ而奉言上候間、御一覽後早々御火中奉希候、拟又此宇和島錫甚輕微之至候得共、時下 御容体伺候寸志迄ニ拝呈仕候、御一笑被成下候得は、本懷之至奉存候、此段申上奉り度、奉愚翰候、恐惶頓首謹言

正月廿七日

二伸、乍憚時下御保養第一ニ奉存上候、兼而悴拝借仕候書物返上仕度旨申出候、奉返呈候、御礼申上度旨申聞候、頓首再拝

閣下拝呈

藤 宗紀

内容 一、宇和島産錫を見舞として呈上。

一、悴(宗城) 拝借の書物返上、謝礼を申し述べべし。

(2) 別紙(1)

内密呈上

御別紙奉謹読候、過日鶴肉乍輕少呈上仕、又愚息よりも差上候所、段々厚く蒙 尊命辱仕合奉拝謝候、且又旧冬愚息より入 尊覧候書物も御返却被成下慥ニ落手仕候、委細被 仰出候趣も奉畏候、早速愚息へも申聞置候、昨年より北

地之事彼家より申立ニ相成候由御承知被為在候由之處、今ニ何之御沙汰無之、如何之訳ニ可有之、松泉近親ニ而其儘相成候哉、其外委細之御内密書奉拝承候、彼地之事も定而過日追々御承知も被為在候半、色々に内訳御坐候哉、其義は承知も不仕候得共、終ニ叔父相続と相成候、松泉專ニ世話ニ而も御坐候哉、尤ケ様申上候も恐入事ニ候得共、一向ニ引受 天下之御為と申方へは参兼候、定而何等内々取入候事も御坐候哉、右之通り叔父相続と相成候様子ニ御坐候、跡は不相替入り置申間敷、弥此後は夷人之方近寄候方ニハ不相成哉、近頃ハ北地松之の方へ先小生方抔ニ而不近寄方ニ仕候とても、外より不入事ニ而も不益ニ相成、安雪三郎在勤中ハ、色々小生義も及なから申候事御坐候、其後悻義も専ラ其続ヲ以、松之方之義ニ付而ハ心配も仕候處、一向ニ内外不揃之事ニ至候間、先手ヲ引、専ラ松泉へ相任候處、近來三郎退ケ候様相成ニ付而ハ、愈私方ハ遠く相成申候、実ニ 天下之御為ニハ甚只今之様子ニ而如何此後可相至、扱々御安心之事、松為ニも不宜事と追々可至かと其義ハ深々氣支敷事ニ御坐候、猶又此後の様子承り候得は、言上内密ニ仕へく候、扱又琉咲矢張滞留之趣も御承知被為在候由、如 尊命ニ私も承知仕候、内密修理咄も悻と申候由、矢張咲人逗留仕候由、実ニ如 尊命不容易事ニ候、此後甚不安之時体は只今申上、不及事なからいよ／＼御不安心は重々様、乍憚常々不肖之私ニ而も奉存上候事ニ御坐候、其内薩も少々是迄と違、役人之内相轉し、老人之家老庄左衛門も古人ニ相成、跡ニ一人続キ用そふニ御坐候所、是もどうか少々内沙汰ニて国へ引取ニ相成候模様ニて御坐候、左様相成候得ハ又一変可仕、跡と出候家老とハ少々志も有之ものも御坐候様子、此後ハちと只今之様ニは有之間しく、佛嘆之るいもさし返候様にも可至哉、其處は只今分り不申、少々ハ模様宜様ニ而竊ニ悦敷、私抔ニ而も奉存候事ニ御坐候、又内密承り候ハ、早々可奉言上候

一、愚息ニ而も当年四月ニは御暇ニ相成候間、此御届物等御指支ニ相成候、殊ニ寄候得は、私へ御頼被 仰下候旨、悻へ御内々被 仰出候由、委曲奉拝承候、少しも差支無之候間、何時御届もの何方へ成共御内々蒙 尊命候ハ、可

取計候間、此段申上奉り候、かきん之事も奉畏候

一、かきん義、阿閑初メ同閑家中等へ炮術指南之事、委細奉畏候、何卒追々左様之風俗移行候ハ、上之御為ニ可然、かきんへも内密対面仕候ハ、咄置候可仕、已ニ阿閑家来も一人歟門ニ入候様子御坐候、伊閑ニ而もとふか存入宜しく、悴逢ニ罷越候節、炮術すゝめ候処、至而存入は宜、追々其心得之様子咄御坐候由、しきりニすゝめ候様申聞置候、又此後之模様追而可奉言上候、とかくニ模様計ニ而如何致候もの哉、其義進申候時は尤之至と申候而は夫切成候、時勢善と存候ハ、速ニ被行度、あしきと被存候得は、其旨可被答処、何もかも尤々ニ而跡なしと相成候事ハ、扱々申てもはりやいのなき事ニ而、扱々きめよふな事ニ而難解、私杯ハ奉存候、委細被 仰出候趣ハ逐一卒恐奉感銘候間、いつれニかきんも炮術等之事等ハ内々相咄候、又何とか工夫仕候而、閑老其外専ラ炮術之被行候様、愚老猶乍不及可仕、悴事ハ四月末に御暇被下次第出立仕候、夫迄は在府仕候、先は内密御請旁申上奉り、少々手痛執筆甚見苦敷、不文誤書等ニ而甚恐入候得共、此段奉言上候

孟春廿七日

二伸、兼而三郎之義ニ付蒙 尊命、何分住所難分候、而御尋之一条段々及遅々恐入奉存候処、漸此節手寄ヲ以相尋候処、如別紙ニ御坐候、甚以不束之書面ながら、其儘奉内密申上候、別紙 尊覽被為在候ハ、可也御分り可被遊候、岡本近江守ハ是ハ当時御留居年寄かと奉存候、是ハ三郎義を帰參為致度と申候而内々世話仕候よし、夫故に其書面ニ認メ御坐候得共、御尋之ケ条ニ而無之候得共、其儘入 御覽置申候、先は此段乍延引申上奉候、頓首、謹言、敬白

① 松泉Ⅱ松平和泉守乗全、三河国西尾藩主、寺社奉行(天保十四年任)、大坂城代(弘化元年転)、及び西丸老中(弘化二年転)を経て、老中(嘉永元・十・十八—安政二・四・八)

② □□三郎未詳。写本で文字が読めておらず、判らない。下曾根金三郎のことか。

③ 弘化三年四月五日上陸以来、那覇に滞留の英人医師ベツテルハイム。前々号「二〇」註①参照。

④ 修理 松平修理大夫 鹿兒島藩世子島津斉彬。

⑤ 鹿兒島藩士調所笑左衛門広郷、同藩の「天保改革」の指導者。嘉永元年十二月十八日、江戸邸で自殺。

⑥ 伊閑 老中松平伊賀守忠優（在職嘉永元・十・十八—安政二・八・四）、信濃上田藩主。

⑦ 岡本近江守成（忠次郎）、勘定奉行を経て、天保十四・五・十、鎗奉行、嘉永三・十一・一卒。

内容 一、過日、息（宗城）ともども呈上の鶴肉への礼状に恐縮。

一、息より呈覧の書物の返却受領。

一、昨年来の松前家処置に何の沙汰もなし。松平和泉守乗全の近親なりし為か。

一、松前家は叔父崇広の相続となりしが、それも松平乗全の世話か。

一、今後も松前家問題は内密なる情報を得ん。

一、琉球英人ベツテルハイム滞留問題と、薩摩藩情を案ず。

一、息、この四月御暇帰国予定の折に、届物は托されたし。

一、下曾根金三郎、阿部・松平忠優らへ砲術指南の件。

一、某三郎のこと。未詳。下曾根金三郎の所在探索。

一、岡本近江守のこと。

(3) 別紙 (2)

別紙拝呈

内密御副書奉拝見、先以御礼申上度、熊沢著述取集、大膳大夫熟覧致候得者可然、佐藤一斎杯とハ相違之處も有之、

可然、尊慮之趣奉謹承、重々難有義御礼申上奉り候、早速集義和書等誦読為致候様可仕候、段々御服臈も不被為在、

御懇々蒙、尊命候段深謝仕候、先右之御礼内々奉申上候、恐々謹言

孟春廿七日

(付紙)

「御鑑奉行 岡本近江守様

此人三郎帰参世話致居候よし故認メ候趣御坐候、御不用とハ奉存候共、万々一何等御考ニも可相成
とて申候、差上申候

松前家老古人 蠣崎少監

当時松前勤番 同 三弥 河井九郎兵衛

① 熊沢蕃山(元和五―元禄四)、京都生れ陽明学者。寛永十一(一六三四)年岡山藩に仕う。一たん辞し、正保二(一六四五)年、再仕官。

② 大膳大夫||字和島藩世子、伊達大膳大夫宗徳(むねえ)、宗城養父宗紀の実子。はじめ宗周、天保元(一八三〇)年閏三月二十七日生。

③ 「集義和書」熊沢蕃山著、一六卷。

内容 一、熊沢蕃山著述を集め、弟(字和島藩世子)宗徳へ読ませるべし。佐藤一斎著とは相違ありとの配慮を謝す。

(附記) 内容が難解で、註記の不十分な個所が多くなった。後考を待ちたい。

(嘉永二年分未完)

本稿は、昭和五十三～五十四年度文部省科学研究費 総合研究(A)「水戸藩崩壊過程の総合的研究」の成果の一部である。

(一九八〇・十・十五)